

小泉癸巳男 『配給物絵日記』 全四冊
 昭和十九年（一九四四）
 三〇・〇×四〇・〇cm



第一冊 昭和十九年1月13日の頁



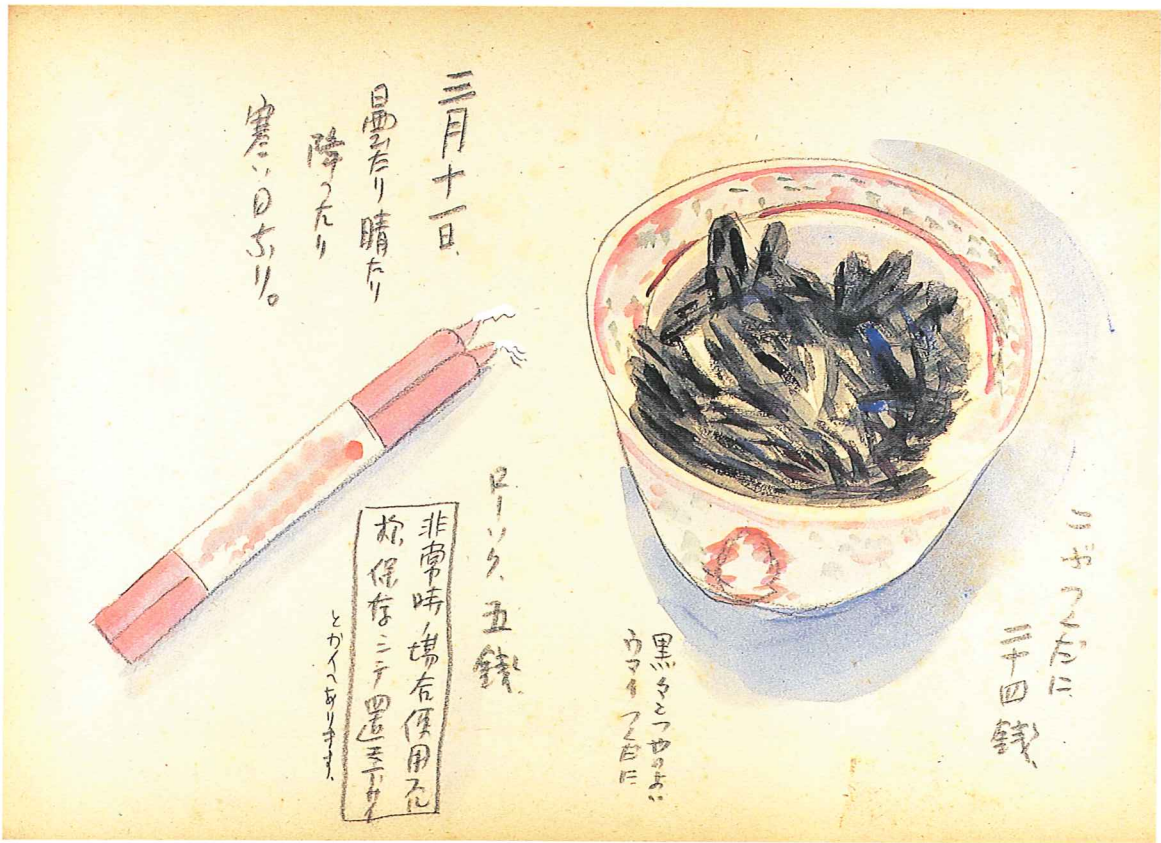
第一冊 昭和十九年1月25~26日の頁

版画家小泉癸巳男による、昭和十九年の食品を中心とした配給物資を描き綴った貴重な記録。

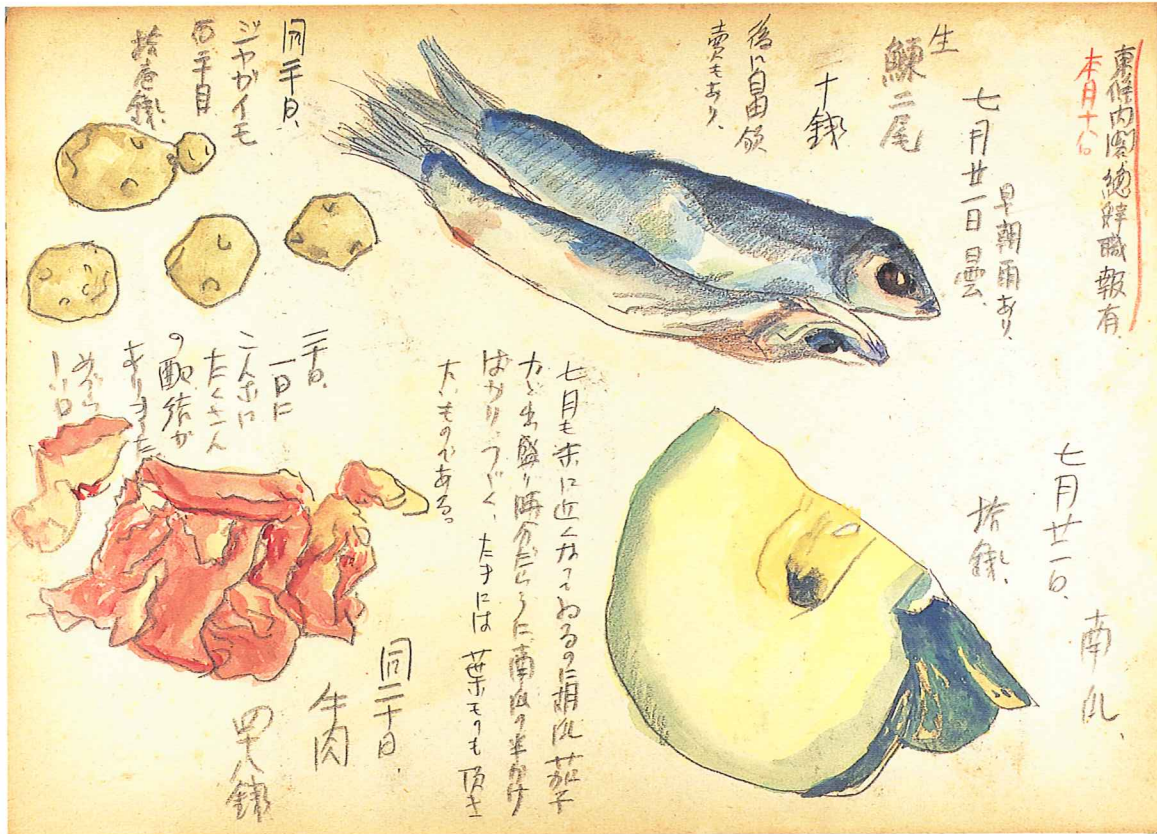
本書67~85頁、「収蔵資料紹介 小泉癸巳男の『配給物絵日記』について」



第二冊 昭和19年3月4~5日の頁



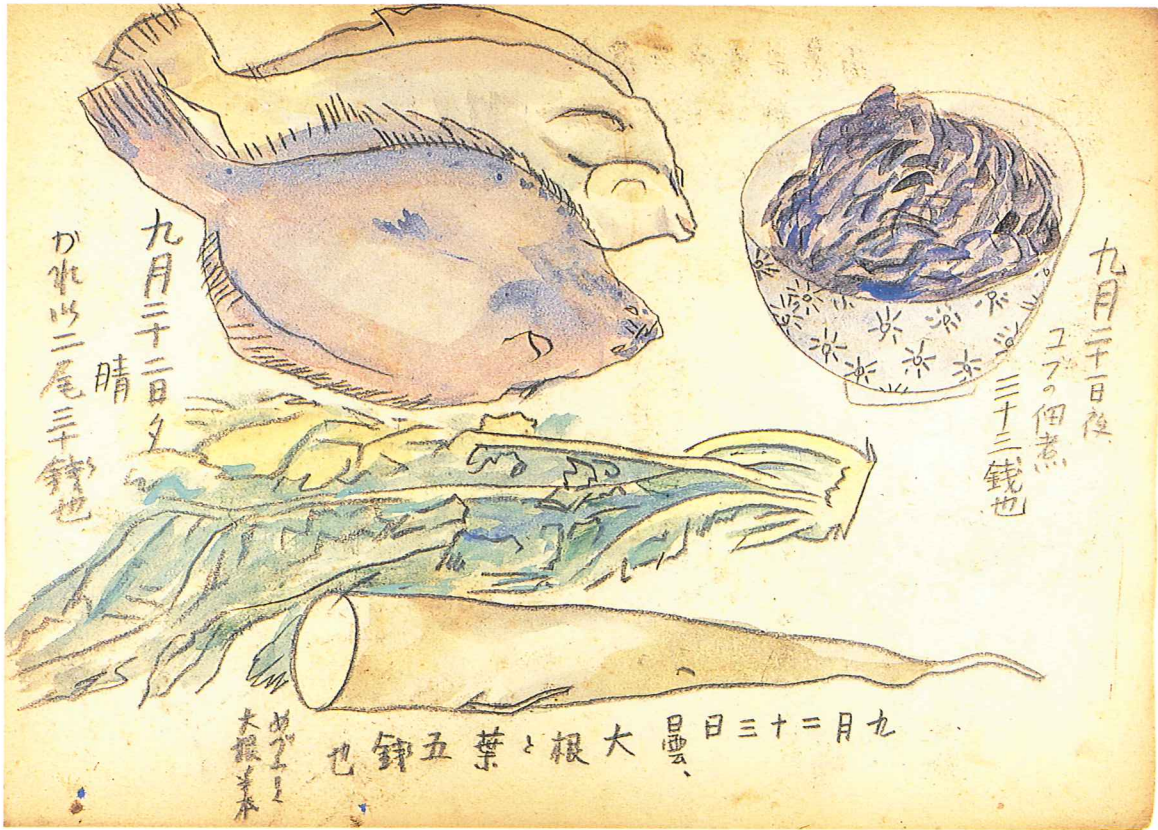
第二冊 昭和19年3月11日の頁



第三冊 昭和19年7月20~21日の頁



第三冊 昭和19年8月8~12日の頁



第四冊 昭和19年9月21~23日の頁



第四冊 昭和20年2月1~3日の頁

収蔵資料紹介 小泉癸巳男『配給物絵日記』

第一冊

昭和館学芸部

小泉癸巳男の『配給物絵日記』について

はじめに

昭和館学芸部が所管する実物資料は、平成十五年末現在、約十万五千点を数える。ここに紹介する小泉癸巳男の『配給物日記』もその内の一点で、絵日記という私的なものではあるが、ほとんど版画しか遺存しない癸巳男の作品を研究する上からも、また当時の配給状況を知る歴史的資料としても、きわめて貴重なものといえよう。

以降、四回に分けて全ページを紹介することとしたいが、はじめに癸巳男の閲歴を紹介し、当資料の概要を簡単に述べてみたい。

小泉癸巳男について

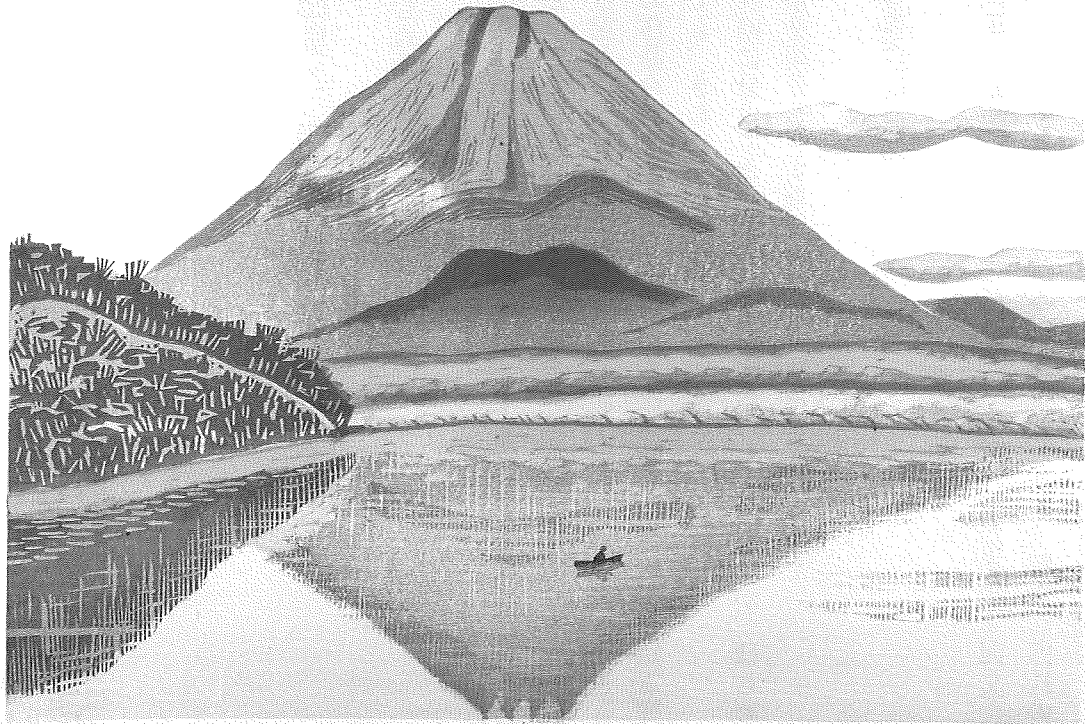
小泉癸巳男の画業に関する文献は少ないが、彼が半生を記した自伝〔自傳〕・『エッチング』八九号、昭和十五年〕と、岡畏三郎氏の研究〔小泉癸巳男の生涯と東京百図絵〕・『版画 東京百景』講談社、昭和

五十三年〕を基に閲歴を簡単に辿ってみた。

癸巳男は明治二十六年（一八九三）六月、静岡市の下桶屋町（現在の、昭和町・常盤町の一部）で生まれた。父は謙吉、母はのぶといい、六人兄弟の第五子（三男）であった。謙吉は徳川家の旧家臣で、松傭と号した書家であり、癸巳男の名はこの年の干支「癸巳」に因んでつけられたという。早産のため幼少より虚弱で、学校に上がってから病欠が多く、得意なのは図画・習字・作文くらいと成績も振るわなかった。父は絵描きに、母親は手先が器用なので針仕事の技術でも身につけさせようと考えたが、彼が選んだ道は絵描きであった。

明治四十二年（一九〇九）六月、ちょうど満一六歳の時に上京。義兄の世話で四谷の西念寺という寺に寄宿し、大下藤次郎が主宰する水道端（現、文京区水道）の日本水彩画会研究所に通うこととなった。ここで科外講師をしていた戸張孤雁・織田一磨と知り合い、この縁により後年、創作版画協会に参加することになる。しかし、寺での生活は三年ほどで終わり、次いで松傭の千字文（書道の手本書）を彫版した彫師・堀越貫一郎の下で、彫りの修行をする。

大正二年（一九一三）には処女作「三色スマイル」を制作し、彫りの修



「富士三十六景 あか不二」 昭和館所蔵

行に励む傍ら、大下が没し解散した日本水彩画会の再建に参加し、水彩画にも力を入れた時期であった。しかし、織田の「東京風景」(石版)や石井柏亭の「東京十二景」の完成に刺激を受け、また七年には日本創作版画協会の結成に参加し、版画による風景画の制作に関心が向けられるようになる。十年制作の「浅草の裏路」は、彼の代表作「昭和大東京百図絵」の先駆となる作品で、浮世絵風の日本的叙情性を重んじた作風に対し、癸巳男は近代化した現実の東京の風景を描くことに専心した。

さらに昭和二年(一九二七)に初めて官展が版画作品を受付けるようになる。翌三年の第九回帝展には「永代橋と清洲橋」を出品して入選を果たす。この作品は昭和五年より頒布が始まった「東京百図」の第一図となっており、十二年に完結した後も版を改め、現在一〇五図が確認されている。また百図のほか、六年から始まる日本版画協会(創作版画協会の後身)展には毎年出品し、「椿」「百日草」(第一回展)、「鏡の前」(八年第三回展。巴里日本現代版画展に出品後、フランス政府が買上げルーヴル美術館に所蔵される)、「賃仕事」「少女弹琴之図」(九年第四回展)など、風景以外にも作域を広げる。

「東京百図」完成後、「富士三十六景」の制作に着手し、たびたび富士山麓を旅して制作に打ち込むが、御殿場で取材中に病をえ、下谷池之端七軒町(現、台東区池之端)より夫人の妹の婚家である埼玉県比企郡の吉見村に療養のため疎開することになった。しかし、「富士三十六景」はついに完結されることなく、昭和二十年十二月七日、享年五三で逝去した。

『配給物絵日記』

絵日記は、癸巳男の手により「二」「三」「四」と番記された、既製のスケッチブック四冊（各三〇・〇×四二・〇cm）よりなる。当時居住していた池之端七軒町において、夫人と二人分として配給された物品を記したもので、内容は必ずしも統一された書式ではないが、配給の日付・品目・数量・値段等とともに、水彩によって配給物の挿絵が描かれている。各冊の頁数（表紙を除く）と配給期間は、以下の通りである。

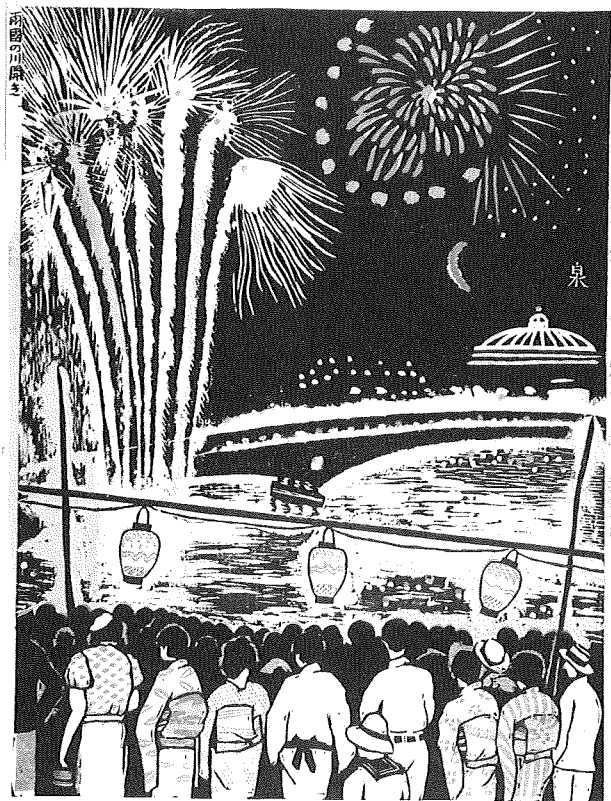
- 「一」 五六頁、表紙三に記載あり
昭和十九年一月三日～二月十三日
- 「二」 五六頁 昭和十九年二月十四日～三月三十一日
- 「三」 五八頁 昭和十九年四月一日～九月十六日
- 「四」 五六頁 昭和十九年九月十七日～十二月二十九日及び昭和二十年二月一日～三月二十四日

但し、各冊とも途中に空白があり、「二」のように表紙裏を使用するものもあれば、「四」では空白が一〇頁にわたって続き、挿絵数はまちまちである。また、記載は必ずしも配給日の順とはなっておらず、原寸大で描かれた配給物の量や記事によって構図を考慮し、数日分をまとめて作画したものと思われる。

序文にあるように、今まで購入したこともないようなものが配給で割り当てられることに興味を覚え描き始めた日記であるが、周囲に見せたところ評判が良く出版を勧められたということである。しかし、癸巳男にはもはや、自刻自摺する体力も気力も尽きており、鹿熊幸吉という人物に日記を託し、刊行の判断を委ねている。結局、版行は行われなかつたようであるが、この経緯は絵日記「四」の巻末に添付された鹿熊氏宛

の書簡一通と葉書二葉に記されている。特に最後の一葉は絵日記と一緒に送付されたもので、鹿熊氏と思われる手で「昭和二十年十二月二十日」と受取り日が記されており、絵日記が癸巳男より鹿熊氏にわたったのは逝去する直前であったことが分かる。この三通には大変興味深い記述が多くあり、詳細は別稿で報告することとしたい。

（昭和館学芸部長 杉本隆一）



「昭和大東京百図絵 両国の川開き」 昭和10年7月作 昭和館所蔵

〔凡例〕

- 一、日付・天気・品名・金額・説明の順に記した。
 - 二、物品ごとにまとめて表記した。
 - 三、略字は正字に替え、旧字はそのままとした。
 - 四、すべて縦書きに統一した。
 - 五、改行は「」で表した。
 - 六、（ ）内は編者の注記を記した。
- 翻刻…
昭和館学芸部 渡邊一弘・財満幸恵

◆1

一

◆2

◆3

配給物「繪日記」
昭和十九年一月より
毎日毎日描いてみる。」

◆4

◆5

昭和十九年
配給繪「日記」

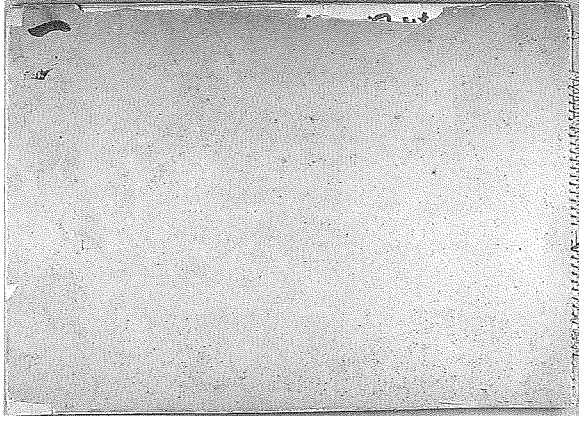
◆6

私がこの絵日記を想ひ着いた」のは今迄買ったこともないものが配給」と云って押賣られて来たのに、これは面」白い記録になるかもしれないと思つて描き」出した。紙面が大きいから原寸大である。本来記録と書かれるなら米味」噌醬油と酒と書なければならぬのであ」るがそれらは配給帳となるから書き込む」必要がないと千恵子様の御意で止てある。下谷池の池端七軒町在住二人」の分の配給日誌である。」

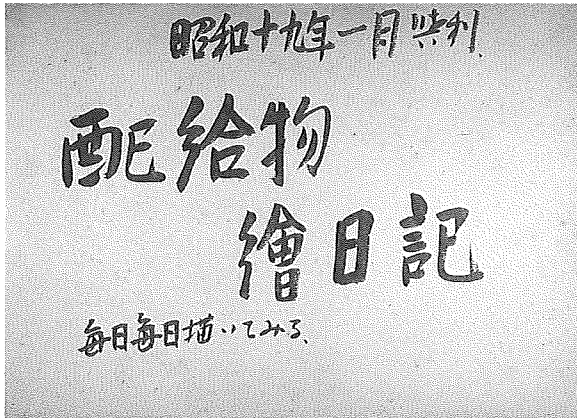
小泉喜詩翁

◆7

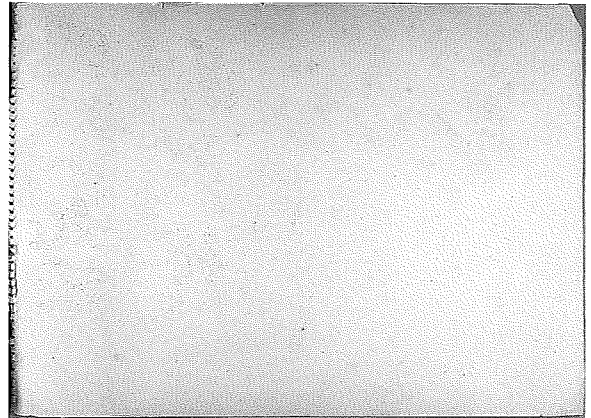
十九年」正月」より」
正月三日」花きやべつ」 價 七十二錢也」
今年初の」配給野」菜」はじめて買った大きな株で」ある。」



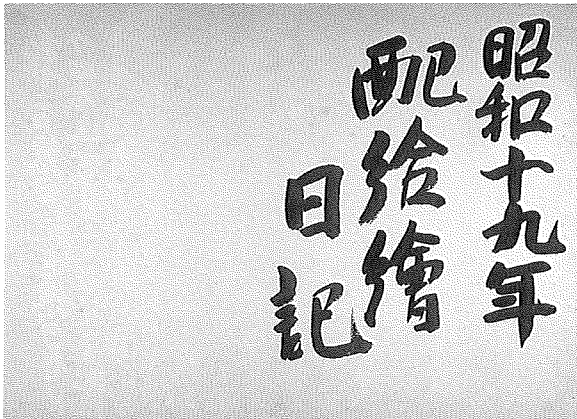
◆ 1



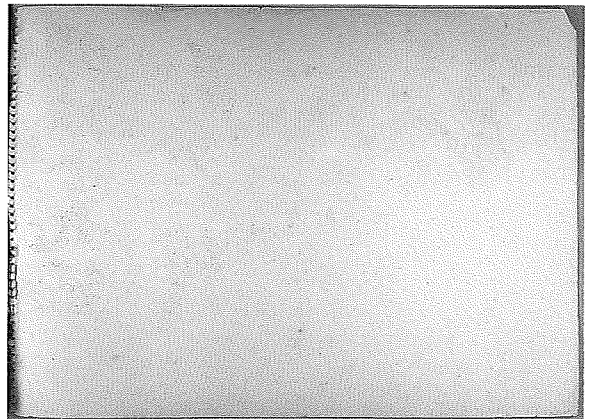
◆ 3



◆ 2



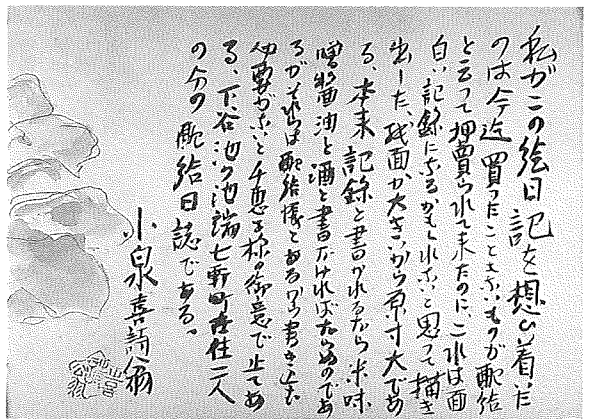
◆ 5



◆ 4



◆ 7



◆ 6

◆ 8

◆ 9

一月七日「
二十銭」
丸乾の得(ママ)配
魚屋」

◆ 10

◆ 11

一月八日 大詔日」
白菜半株 拾
三日以来配給は休み」
前あまり大株
たから今日は」半株」
銭」

◆ 12

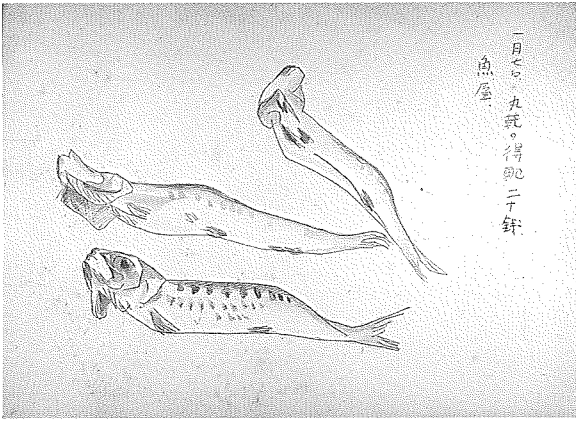
◆ 13

一月十日 鱈干
三十一銭
三人分おまけ」

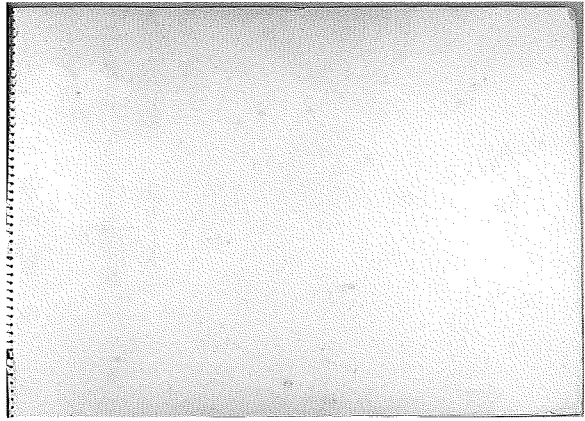
◆ 14

◆ 15

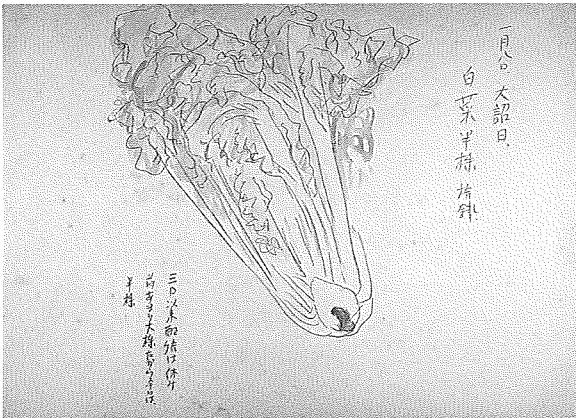
一月十日 小豆と」
白インギン」
一合づゝで汁十四銭」
配給品」



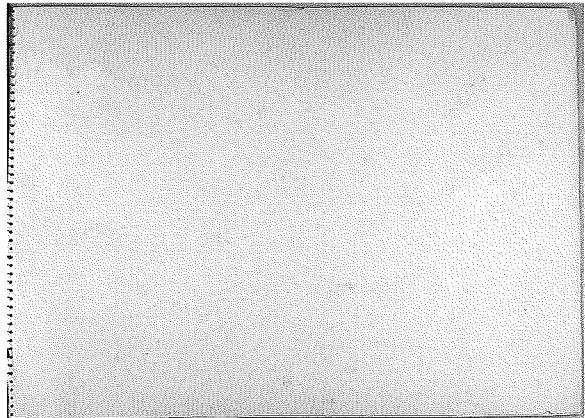
◆9



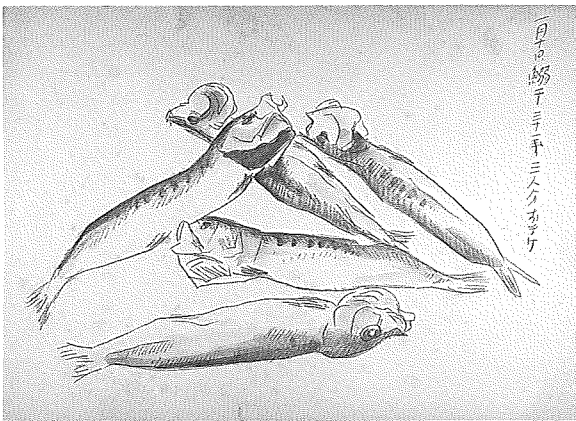
◆8



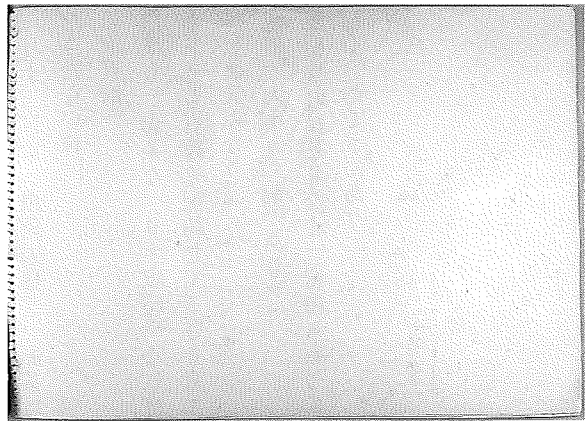
◆11



◆10



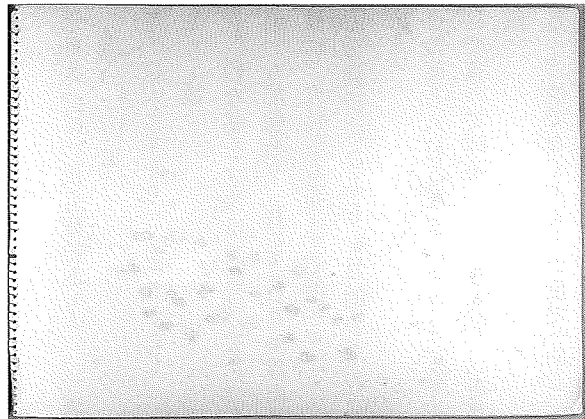
◆13



◆12



◆15



◆14

◆ 16

◆ 18

◆ 20

◆ 22

◆ 17

一月十一日「かぶ三個 ゆづ二個」
二十五銭」
しほから一人三十匁十銭」二人で
六十匁廿銭」 ありたり」
八百物」

◆ 19

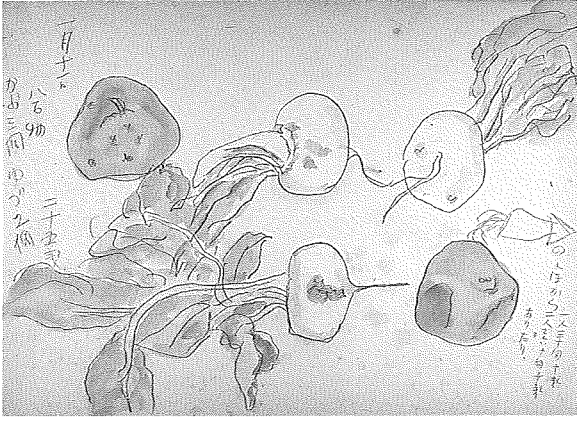
一月十二日 毎日晴天つゝき、風強
く、寒し」 味噌積（ママ）大根
二十五銭」

◆ 21

一月十三日「白菜大株」 赤茶け
たきたない株」
二十五銭」
白菜も」赤茶な」り」戦時」なれば
赤茶葉も有難く配給して下さり食ふ
べしと云ふなり。」
蜜柑」大小五六個」あり」
配給なれば是非なく」蜜柑もめづら
しく」たくさんあり。」

◆ 23

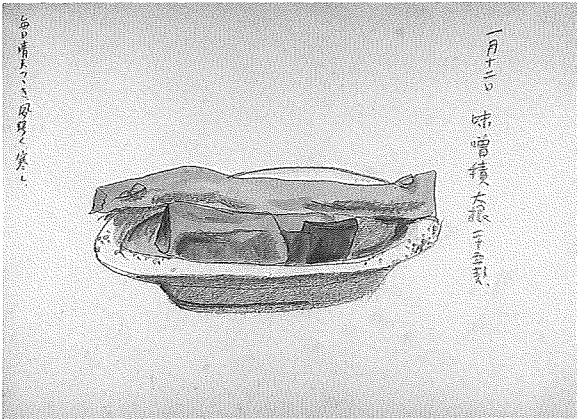
一月十三日の配給」むき身も配給
されてゐる」 四十五銭」
生で描き」たかったが」煮てしまつ
た。」
正月入って」炭も配給あり」 一表
（ママ）三元也」
冬空に大たすかり」 ありがたし。」
薬五十銭」
炭に妙な薬を」つけて置けばと白い
薬」も配給あり、且しこれをつけた」
炭は、火付きも悪くすぐ消へた」
消費経済になるも」目的のためな
り？」
目の薬と八目うなぎニタクシ」廣小
路で買って帰る。」 一クシ」 五十
銭」
さき蒲焼でなく丸まゝの焼で」ある。」



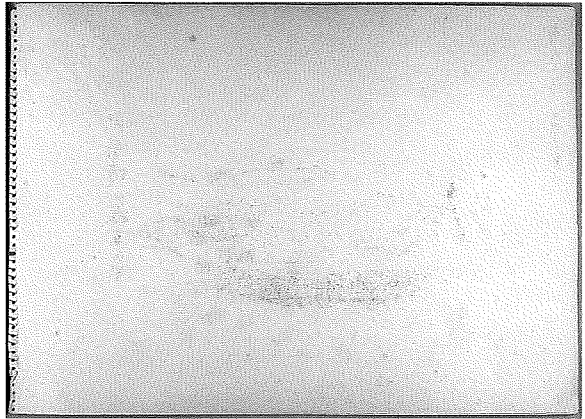
◆17



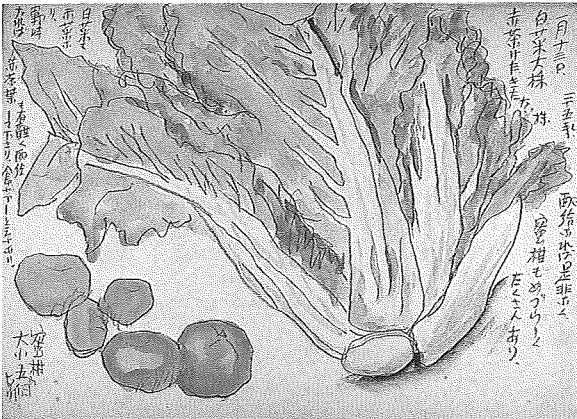
◆16



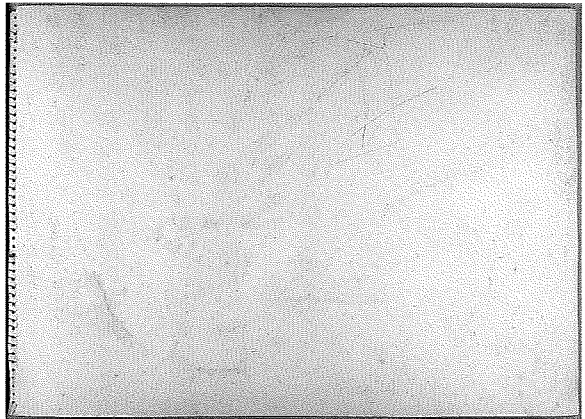
◆19



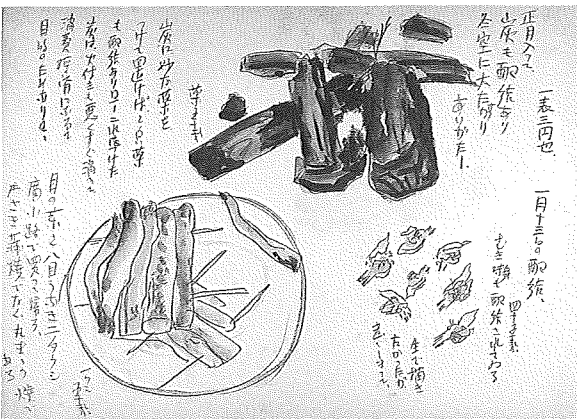
◆18



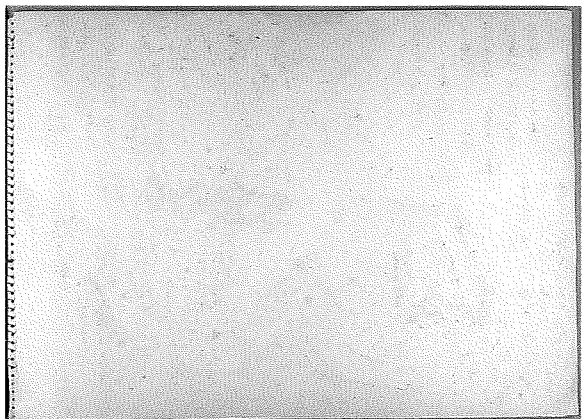
◆21



◆20



◆23



◆22

◆ 24

◆ 26

◆ 28

◆ 30

◆ 25

一月十四日分「配給」 削節も配給」
になつて来た」
有難いものである。」 五十八銭」
めづらしく」 油あげ二枚」 拾銭
也」

◆ 27

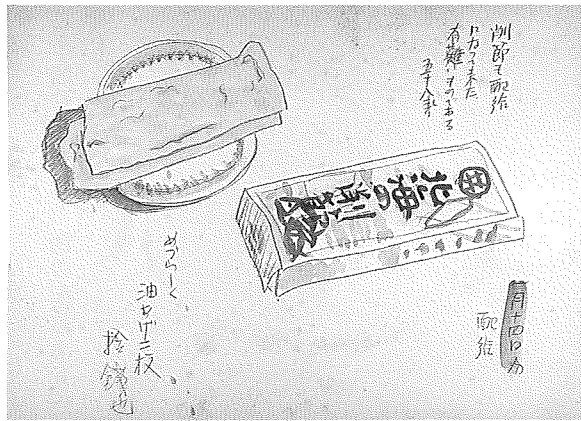
一月十五日」 大澤庵」 二十五銭」

◆ 29

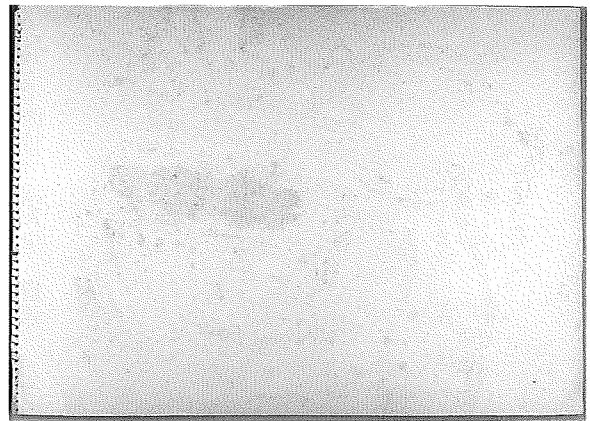
一月二十三日」 澤庵の配給は尚中
に大なり有難し」 十一銭也」
前回の大澤庵より勝彦の結婚のため
六七日間休み
静岡へ旅中」につき配給物を得られ
なかつたが、株の千枚積が頂」けた
相であるが寫さず。」
速成なるか彩色大根の如くなり。」

◆ 31

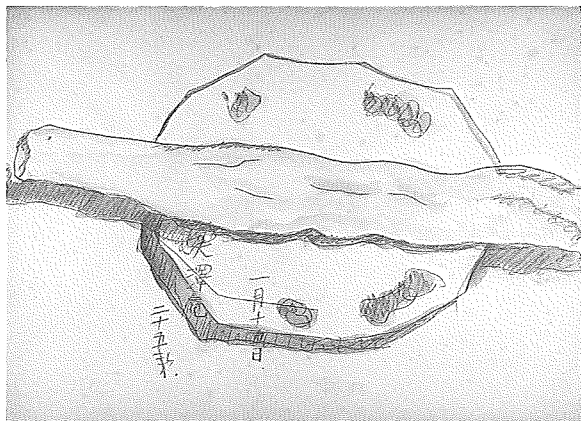
一月十六日」 津久田煮 二十二銭」
きざみこぶ」配給物にまづいうまい
と」云ふべからず。」配給して下さる
ものは」うまいものばかり也。」



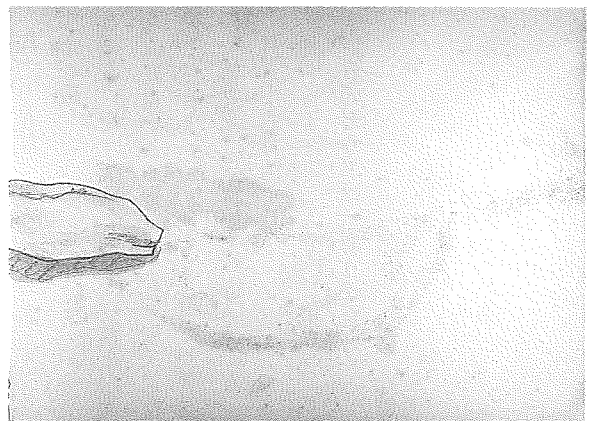
◆25



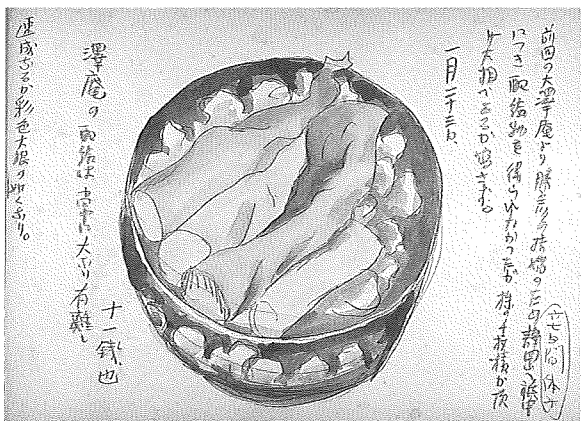
◆24



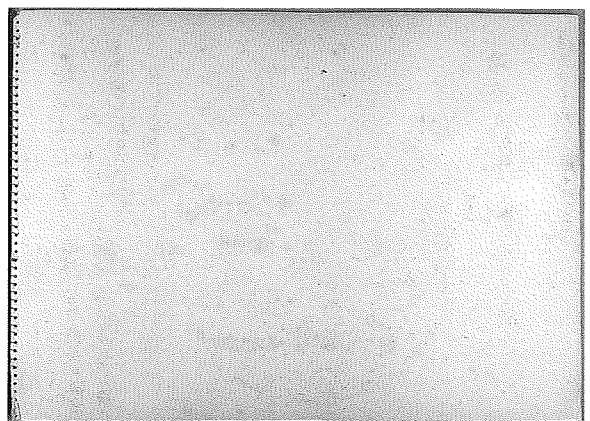
◆27



◆26



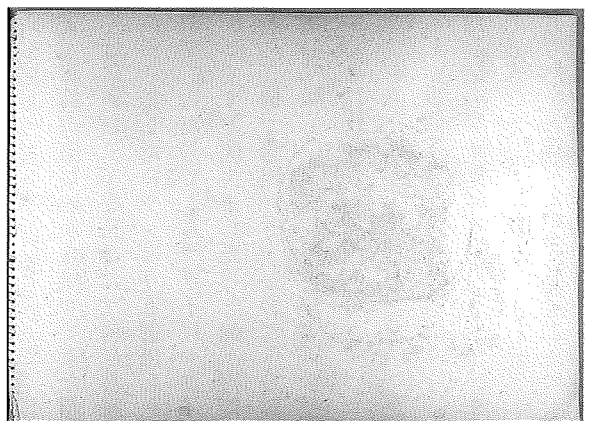
◆29



◆28



◆31



◆30

◆32

二十四日 夕
肉の配給あり
四十八銭

◆34

◆36
一月二十八日 夜
夜になってから「鮭の切身の」配給
あり有難

◆38

◆39

一月三十日「曇」亡父命日「玉
子二個、拾五銭也、」
玉子と申せば農家へ買い出部隊が行
きました。玉子を下さいと云って「
五個出してくれたから拾円出してお
釣を貰ふつもりでみました」が、其
ま、お釣が出ないから帰って来た相
で後に再び玉子を買ひに「同じ農家
へ参りましたらやっぱり五個出した
ので拾円出してから」玉子は一ツイ
クラですと聞、ましたら一個二円だ
から五個で拾円」さすがのんきな買
出し部隊もびつりした相です。「有難
いことに配給は二個拾五銭です。」農
家でも当然として聞商買します。「恐
ろしい世間になってゐます。」
慰問袋の袋が配給になりました。「十
七銭也。」
さて何を入れたものでせう？」

◆33

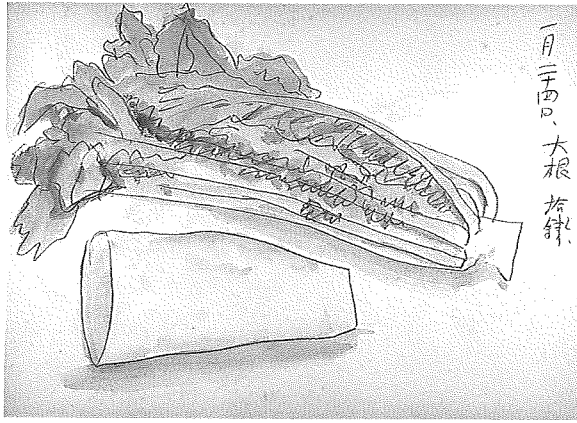
一月二十四日「大根 拾銭」

◆35

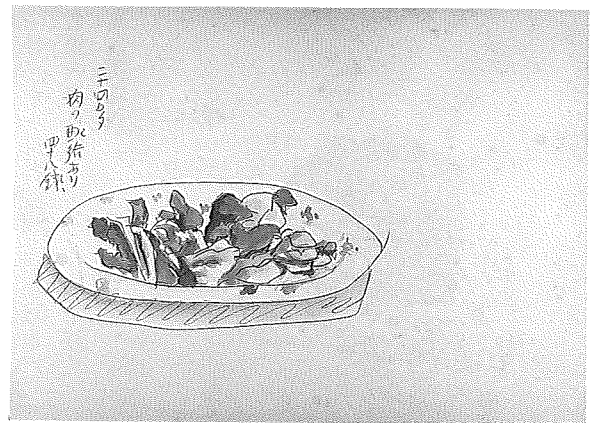
一月二十五日 曇寒し「あんこう」
二十一銭
きのきいた「配給である。」ねぎ白滝
なんかはいつ「なるのかついでに配
給」させ玉へ「あんこう鍋で」雪空
の「寒さを」一ぱいと「ゆくか」
一月二十六日
豆腐「一丁」二人分「拾銭」
寒い日のとうふは「ありがたい」

◆37

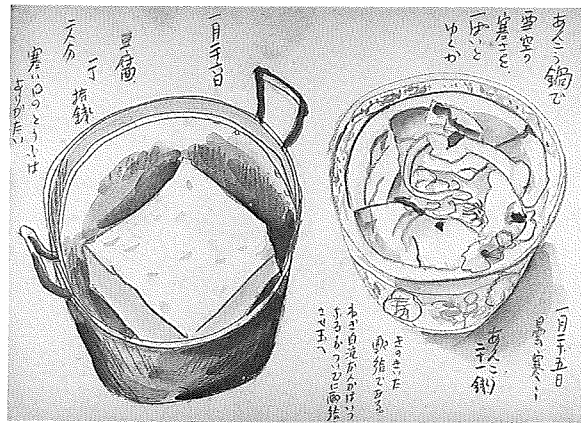
一月二十八日「白菜」四半
十七銭也。
大株を四ツ切り「にの一ツ也。」くづ
葉と「いへども大切」な食料也。」



◆33



◆32



◆35



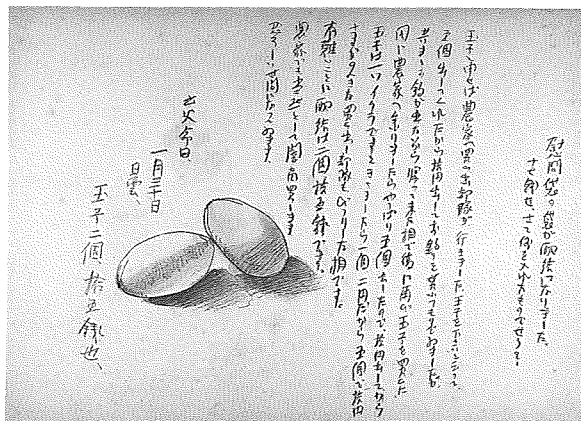
◆34



◆37



◆36



◆39



◆38

◆40
一月三十一日「とろろ芋 三十五
錢」
今日は大変「たくさん」配給が
ありました。」

◆42

◆44

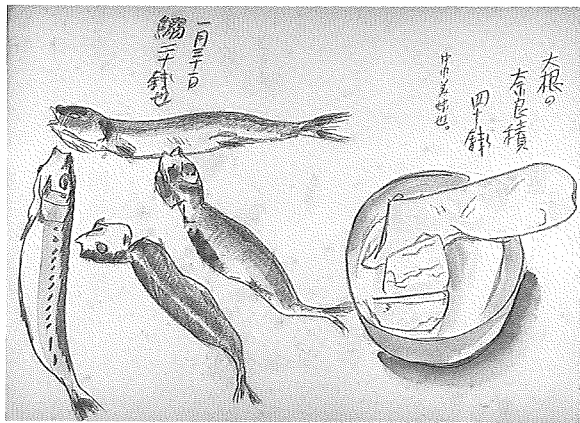
◆46

◆41
一月三十一日「鰯 二十錢也」
大根の奈良漬(ママ) 四十錢」
実に美味也。」

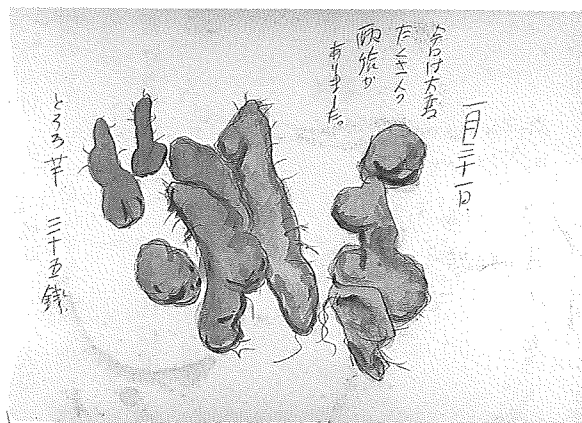
◆43
十九年二月の配給」
二月二日「カレイ 二十錢」
野菜が無いから淋しい。」

◆45
二月四日」
大澤庵」
十九錢」

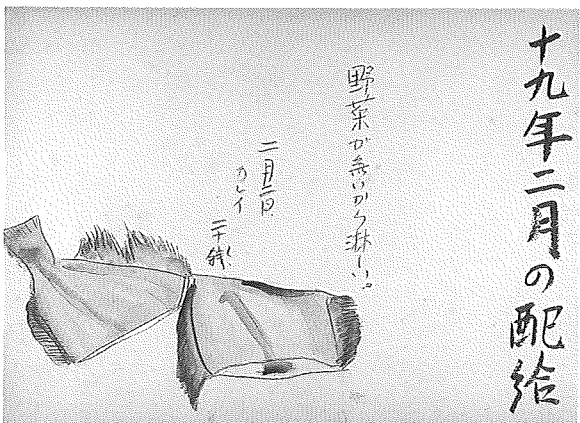
◆47
二月五日」
鱈は味噌汁」の身にとの」ことです。」
ちり紙」 十八錢」 二帳」



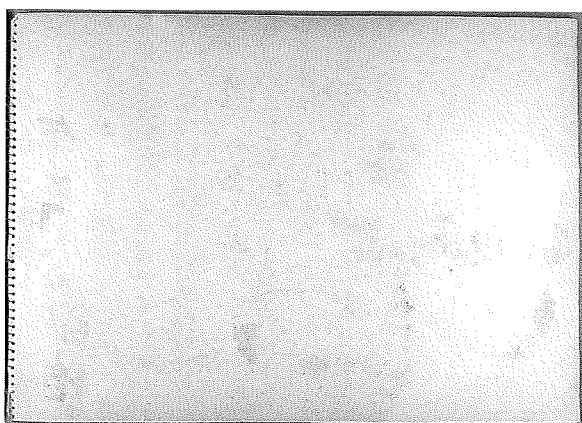
◆41



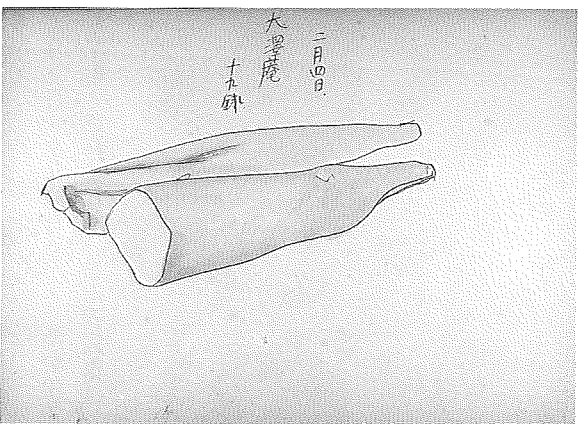
◆40



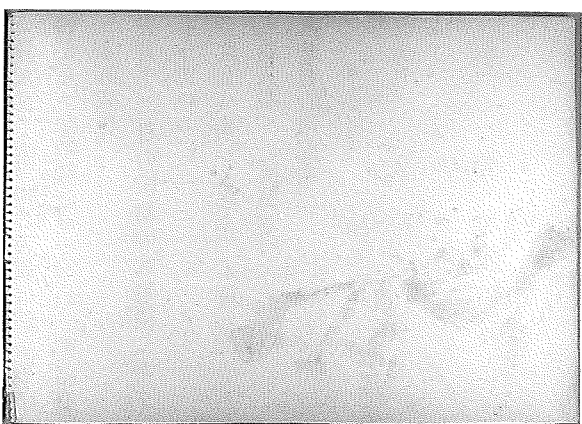
◆43



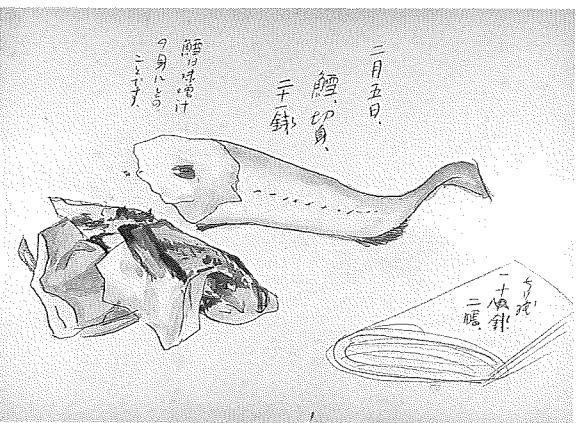
◆42



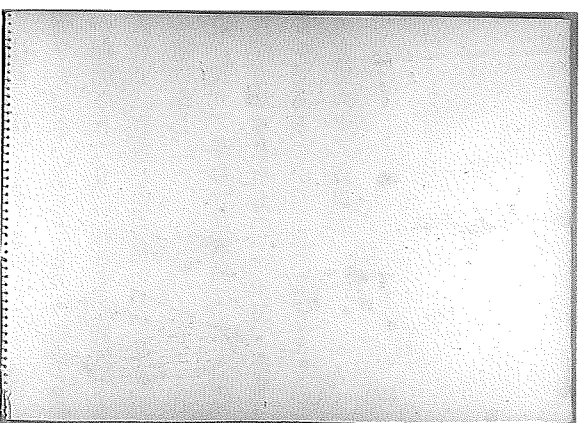
◆45



◆44



◆47



◆46

◆48

二月六日 夕「牛肉の配給」が有り
りました。「四拾八錢也」

◆50

◆49

二月六日 晴「風強し」 大根三
切の一片。「葉は半分。」 拾二錢
也。」
青いものは去月「二十八日以後であ
る。」 久し振に「青いものを」得る。」

◆51

二月八日 晴「風強し。」 大詔日。
トロロこぶ、も「たくさん配給され
たもので、」八拾五錢。」
うまくないものは平等で「うまいも
のは人別で、」配給が隣組の例「だと
云云。」
茄子の「駒切りと」大根の切干の「
辛子付け」二十五錢」
うまくないもたくさん」ありがたく
もないと評判也。」

◆52

二月九日 夕 静なり。「鱈が今夕
も配給」されました。二十五錢也。」

◆53

二月九日 晴。「お天氣は静なり。」
朝から「味噌積（ママ）」の「配給有。
二十五錢也。」
去月十二日の配給の味噌積（ママ）
もうまいのに、」
今度もうまいと思ふ。有難し」。
丸物大根、 九錢也」
九日昼の増配也。」

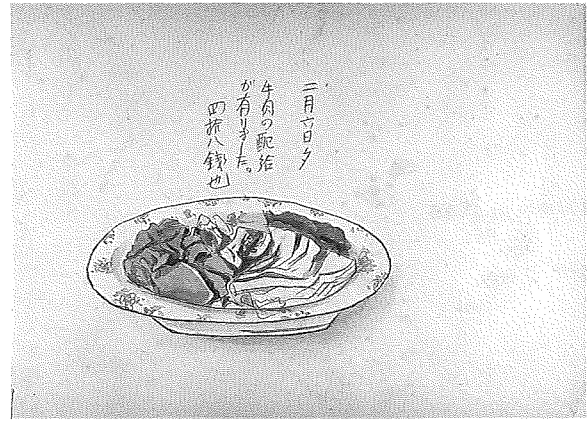
◆54

◆55

二月十一日」
焼リングゴをつぶしたものの「始末もの
が配給されたり、」味もも「砂糖でも
入れて、」煮返したら良いのでせうが」
砂糖はなし。」
讚（贅力）澤も「高價品。」六十匁」
貝柱をつぶしたものの、」十匁、あまり
少々である」が、 せいたくなもの」
両方で六十二錢也」



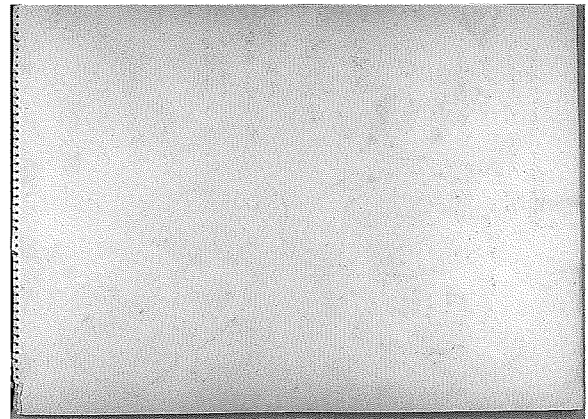
◆49



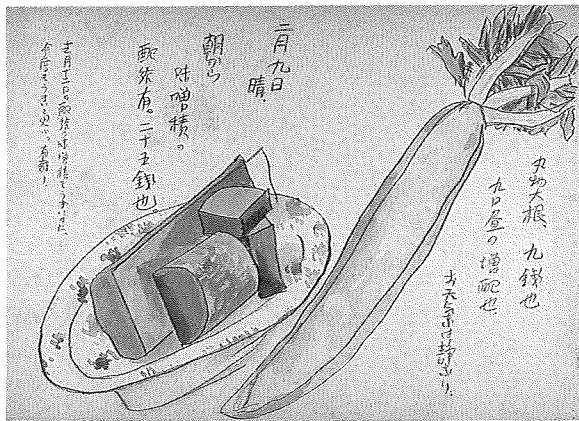
◆48



◆51



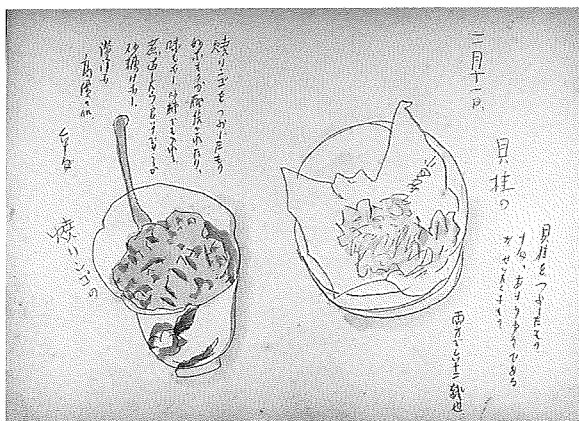
◆50



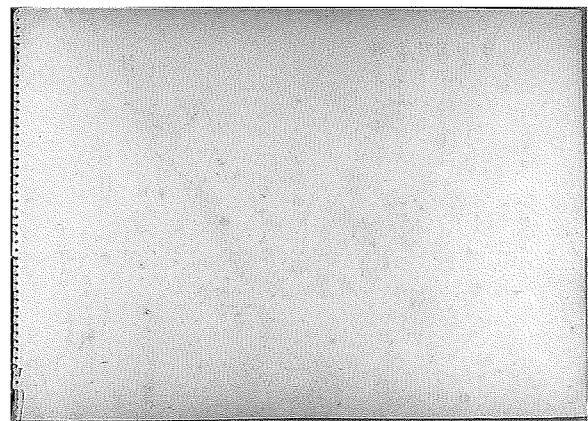
◆53



◆52



◆55



◆54

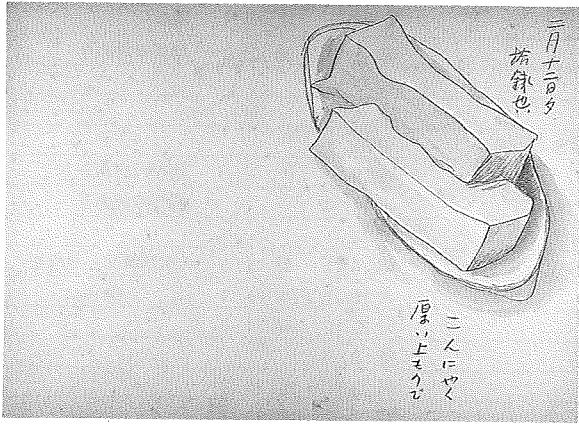
◆
56

◆57
二月十二日夕「こんにやく」厚い
上もので「拾銭也。」

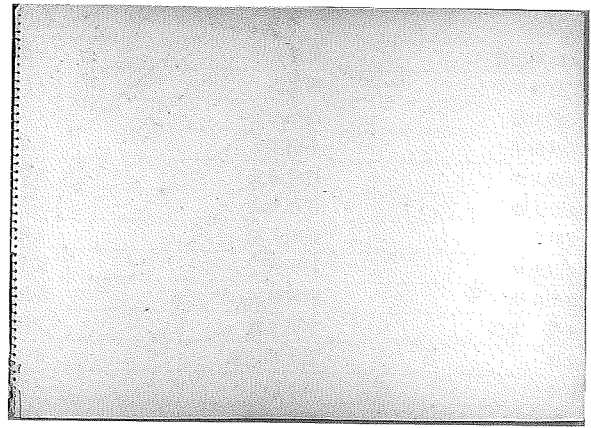
◆
58

◆59
二月十三日晴「
ツ」二拾八銭。」
花キヤベツ
二

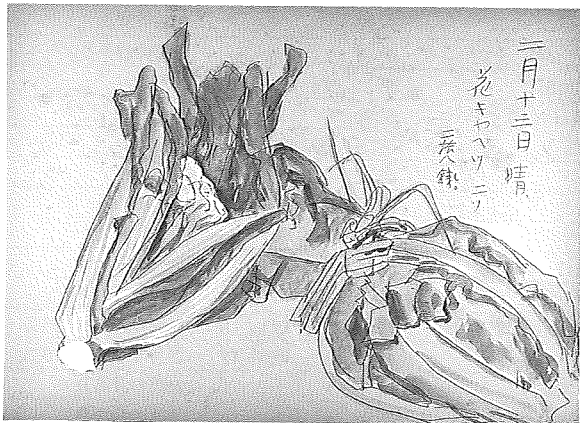
◆
60



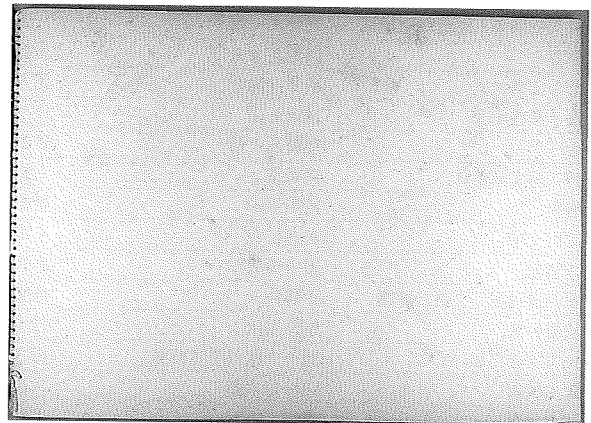
◆57



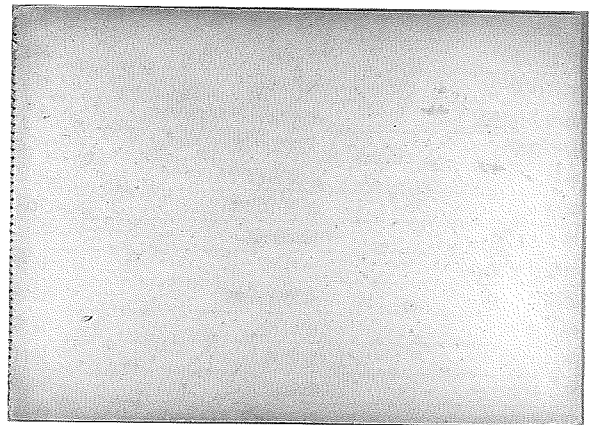
◆56



◆59



◆58



◆60